

## 2. アフリカ南西岸漁場についての見聞

佐藤 敏 郎 (海洋水産資源開発センター)

1976年4月4日より10月11日迄の191日間、海洋水産資源開発センターが第1オリエント丸(総トン数2,202トン、主機2,880馬力、スタントロール船)を用船し、アフリカ南西岸の漁場調査を実施した際の見聞について述べる。

### 1. 調査の経過

1) アフリカ西岸(南部)沖合海域の調査は、当初、51年4月から52年2月までの約10カ月に亘って行う予定であったが、調査途中、10月より急拠アルゼンチン沖合に計画変更になったため、当海域の調査は4月～9月の6カ月間となった。なお、アルゼンチンへの航海途中、プロブレイ海台の調査を実施した。

2) 西岸(南部)沖合海域の調査は、操業日数157日、操業回数987回、漁獲量1,353.9トン(製品量1,002トン)であった。

漁獲物で製品化された魚種は17種類で、各魚種の漁獲割合はメルルーサ類87%、アジ5%、アンコウ3%、キングクリップ2%、アカシマダイ2%、その他はタイ類、ヤリイカ、カニ等で、アグラスバンク海域を除く他の海

域における漁獲は、メルルーサが圧倒的に多かった。漁獲されたメルルーサの体長組成は34～38cmが16%、38～42cm 27%、42～46cm 31%、46～51cm 16%、51～58cm 8%、58～65cm 2%である。

3) 調査は西岸の海域のほか、ワルビスリッジ海域を含め、これらの海域を3航海にわたって調査した。

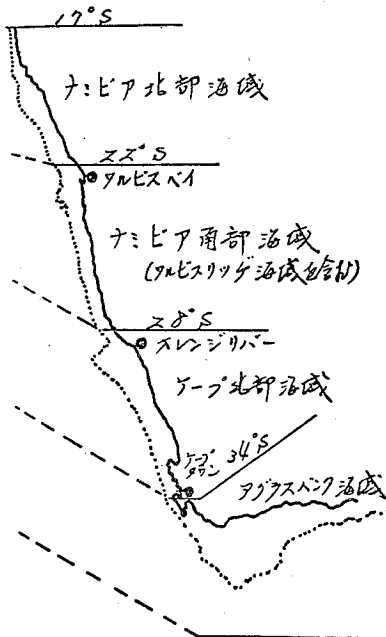
4) 各航海で漁獲の主体をなしたメルルーサ類の漁場形成は、28°S付近を中心として、北部海域では280～360m、南部海域では400～460mの水深であった。28°S以北のナミビア北部、南部海域の漁獲は、主にメルルーサ・カペンシス(浅海性)であるが、漁獲状況は全般に散発的であった。

比較的連続して漁獲された海域は、ナミビア北部海域の18°～21°S付近であるが、漁場は南下する沿岸反流域の外縁部付近に認められた。また、反流域の海域には大量のクラゲの分布が確認され、この影響のためか、魚群の分散傾向がみられた。メルルーサ・カペンシス以外の漁獲は水深400～600m付近でカニ、200～300m付近ではアカシマダイ(キダイ類)、アジ、また大型のウシノシタ類の漁獲がみられた。ナミビア南部海域のリュエデリッツ沖合は(水深300～380m)メルルーサ・カペンシスの主漁場で、外国漁船の操業が多く認められたが、魚体は小型で網もれが多く、漁獲の対象とはならなかった。

28°S以南のケープ北部海域では、主にメルルーサ・パラドクス(深海性)を漁獲した。漁場の形成は28～30°S付近の水深400～600m付近であった。特にオレンジリバー沖合は4月上旬～5月上旬の短期間であるが、漁獲は347トンと多く(1網最高15トン以上)、これは全調査期間を通じ、約1カ月間の漁獲としては最も多かった。

メルルーサ類以外の漁獲物はキングクリップ、タチモドキ、キンメダイ等であるが、特にタチモドキは産卵群で、1網20トン以上の漁獲があった。また、4月上、中旬にヤリイカの漁獲もみられたが、数量的には極めて少なかった。

アグラスバンク海域の調査は、バンクの陸棚上水深75～140m及び陸棚斜面(西斜面及び南東斜面)の水深440～630m付近を行った。陸棚斜面でのメルルーサ類の漁場形成はみられず、操業の対象となった海域はバン



第1図 調査海域区分

遠洋トロールに関する研究座談会

ク中央部と沿岸付近であった。陸棚上で漁獲対象となったメルルーサ・カペンシスは群としては薄く、漁獲も散発的であった。メルルーサ類以外の漁獲は、アジが1網10トン程度みられたが、他はヤリイカ、タイ類、ホウボウ等であった。

ワルビスリッチのバルディバ・バンクの調査は1日のみであるが、海図上の浅所はみられず、操業した海域は水深890~1,000m 台の台状地形である。漁獲物はヤセムツ、カニ、ヒウチダイ、ソコダラ、カサゴ類及び深海性のエビ類(3種類)であるが、製品としては皆無であった。

2. メルルーサ類について

メルルーサ類の漁獲はワルビスリッチ海域を除き各海域で漁獲され、総漁獲量の88%を占めたが、これら漁獲されたメルルーサ類の特徴は次の通りである。

1) メルルーサ・カペンシスは全般に浅海性で、アグラス・バンクの陸棚上及び28°S 以北のナミビア南、北部の水深380m(底水温8°C以上)で浅での漁獲が圧倒的に多かった。

海域的にみると、主にリュエデリッツ沖合からワルビスベイ沖合付近の水深280mで浅では体長32~35cmの小型が多く、300~380m付近では38~45cmの体長がみられ、深いほど魚体が大きくなる傾向がみられた。また、性成熟は各時期とも熟度の進んだものが認められ特

第1表 漁獲状況

期 間		4月4日~6月1日	6月4日~7月31日	8月7日~9月25日	合 計
海域	航海回数	第1次航海	第2次航海	第3次航海	
ナミビア北部海域	漁獲量		263.6	166.5	430.1トン
	操業日数		28	19	47
	操業回数		185	149	334
			メルルーサ 84% アンコウ 5% アジ 4%	メルルーサ 84% アジ 8% アンコウ 4%	
ナミビア南部海域	漁獲量	80.6	65.3	83.3	229.2トン
	操業日数	12	14	15	41
	操業回数	73	78	99	250
		メルルーサ 92% キング 3% アンコウ 3%	メルルーサ 93% アンコウ 4%	メルルーサ 80% アジ 11% アンコウ 6%	
ケープ北部海域	漁獲量	567.2	35.0	16.6	618.8トン
	操業日数	47	8	5	60
	操業回数	282	44	20	346
		メルルーサ 94% キング 4%	メルルーサ 93% アンコウ 3% タチモドキ 2%	メルルーサ 94% アンコウ 3% キング 3%	
アグラスバンク海域	漁獲量			75.8	75.8トン
	操業日数			9	9
	操業回数			57	57
				アジ 53% メルルーサ 34% キシマダイ 7%	
合計	漁獲量	647.8トン	363.9トン	342.2トン	1353.9トン
	操業日数	59	50	48	157
	操業回数	355	307	325	987

(プロブレイ海台の調査(1日)を除く)

徴的であった。

ワルビスベイ以北の海域は、水深 300 m 付近で体長 45~50 cm 台の性成熟の未熟な索餌群と思われる魚群が主体である事が特徴的にみられ、しかも各時期を通じてこの傾向があった。体長 65 cm 以上の大型魚はワルビスベイ南西の 23~24°S 付近の水深 350 m 付近で散発的にみられたが、群の移動は早く連続した漁獲はみられなかった。アグラスバンクの魚体は沿岸部海域で大型の産卵後の魚体 (60~90 cm) がみられたが、群は薄く、1 網最高 1 トン程度であった。

2) メルルーサ・パラドクサスはカペンシスよりも深海性で、漁獲された水深は 400~600 m (底水温 7°C 以下) 付近であった。また魚体は深いほど大型となり、雌魚体の出現が多くなる傾向がみられた。28°S 以北の海域ではリュージェリッツ西方沖合及びワルビスベイ南西沖合の水深 400~470 m 付近で部分的に魚群がみられたが、漁獲は少なかった。しかし、量的には少なかったが、体長 55~60 cm の魚体が漁獲されたワルビスベイ南西の水深 400~470 m の海底起伏の多い海域をみると、漁獲は 1 網最高 1.4 トンで、しかも破網が続いたため調査を断念したが、濃密なアミの群と、更にパラドクサスの群としての北限とも考え合わせると、時期的には魚群の密集があるものと推察された。

28°S 以南の海域で漁獲の主体をなした漁場は、ケープ北部海域の 28°~30°S 付近の水深 400~460 m の海域であった。漁獲は 4 月上旬~5 月上旬であるが、魚体は水深 400~430 m で体長 36~40 cm、450 m 以深で 44~50 cm 台が主体であった。体長 36~40 cm 台の魚体は各航海を通じ雌雄とも未熟群が圧倒的に多く、50 cm 台の魚体では、4~5 月の限られた短期間において半熟から半熟後期と考えられる雌の出現がみられた。しかし、この群は 6 月以後はみられず、逆に産卵後の魚体が比較的混獲される傾向があり、特徴的であった。

アグラス・バンクの陸棚斜面の調査では魚群はみられず、漁獲された魚体は体長 60~70 cm の放卵後が主体であった。

### 3. 500 m 以深の海域について (西岸 (南部) 沖合海域)

調査した海域で、水深 500 m 以深についてみると、漁獲物で製品化されたものは、メルルーサ類及びカニ等である。

海域的にみると、ナミビア北部海域でカニの漁獲があり、他はメルルーサ類のみであった。これら 2 種類の製品魚種のほかに深海性のサメ類(ツノザメ、フジクジラ)、ソコダラ類、ヤセムツ、クロマトウ、エビ類、カサゴ類等であった。

### 4. プロブレイ海台の調査について

プロブレイ海台 (31°04'S, 34°13'W) の調査は、ブエノスアイレス入港予定等の関係もあり、10月10日の夜半の 1 曳網のみである。曳網水深は 648 m (底水温 7.0°C) で漁獲量は 80 kg であった。漁獲された魚種はヤセムツ 70%、フサカサゴ 20%、ツノザメ類 10%、他はキンメダイ、イセエビ、エビ等であった。

### 5. 調査結果の所見

1) 漁獲の大半を占めたメルルーサ類の中で、メルルーサ・カペンシスは浅海性であることから外国船の大半が集中的に操業し、しかも魚体は小型であったことを考え併せると、現段階では極めて高度に利用されているようで、今後、この魚種を開発対象魚種としては多くを期待できないものと考えられる。

2) メルルーサ・パラドクサスは今回漁場として比較的に利用されていない 28°~30°S 付近において好漁をみたが、この中で特に産卵群と考えられる群を捕捉した。これは、アグラス・バンクで産卵すると考えられる時期 (12~4 月) とも考え併せると、海況的、地理的要素から 28°S 以南の西岸沖合には産卵後の索餌回遊が想定される。

3) メルルーサ・パラドクサスの主漁場となった 28°~30°S 付近の海域は、メルルーサ以外の有用魚種として、ヤリイカ、タチモドキ、キンメダイ等がみられ、特にタチモドキは多量にみられた。この魚種は産卵期であったが、小型のため (90~95 cm) 大半投棄され、製品は少量にとどまった。しかし、生物学的に考えてもこれらの大型が存在するはずであり、今後はキンメダイ等と合せ、更に精査し、合理的な利用をはかるべきである。